

トップは語る



ユニークな発信力を 次世代へつなぐ

四国支部 国立大学法人香川大学長 笈善行氏



かけひ よしゆき／1954年生まれ。京都大学医学部卒。1982年より関西電力病院、国立姫路病院、京都大学附属病院で臨床医として勤務。2001年香川医科大学医学部教授、2003年香川大学医学部教授、2008年香川大学医学部附属病院副院長などを経て、2013年香川大学副学長、2017年香川大学学長に就任。面白いと思ったこと、ストライクだと思えることには間髪を容れずに着手する。日本の劇的な変化がすぐそこまで来ている、今できるだけの種を蒔いておかなければならないと考えているからだ。

大学改革のベースは 「デザイン思考」

2018年4月、香川大学の本格的な大学改革がスタートしました。「創造工学部」の新設、医学部「臨床心理学科」の設置、経済学部の再編など大がかりな改革です。新設した創造工学部では「デザイン思考」と「リスクマネジメント」をベースにカリキュラムを編成しています。これからのものづくりは、いかにしてユーザーに高い満足感を提供できるかということが求められており、工学系の学生に「デザイン思考」教育は欠かせないという思いを持ったからです。

デザイン思考とは、顧客の視点に立って顧客の課題を絞り込み、解決策を形にし、どのような付加価値を

提供するのか、という一連のものづくりのアプローチを指します。もちろん、このようなアプローチには常にリスクが伴いますし、失敗から学ぶことも必要になります。そこで本学では「デザイン思考」と「リスクマネジメント」を対(つ)いにして取り入れました。現在、デザイン思考教育は創造工学部のみで行っていますが、いずれ全学に展開する予定です。デザイン思考教育をより強化するため、民間企業で製品開発やプロダクトデザインに携わってきた方々を教授陣として迎えています。

医学部に設置した「臨床心理学科」では心理学に加え医学の基礎的知識を体系的に学ぶことを主眼としています。近年、医療現場では認知症や生活習慣病など、長くつきあわなけ

ればならない病気が増え、患者さんやご家族の心理面にも重点を置いてケアする必要性が増しています。「臨床心理学科」では総合的な視点を持った人材の育成を目指し、新しく国家資格となった公認心理師を養成するという目的も持っています。

工学や医療分野に限らず、専門的に特化したものだけを学ぶのでは、社会の変化のスピードに対応できません。これからの社会を担う人たちには、物事を総合的に俯瞰的に見る能力、長期的視野に立つ能力、そして失敗してもしなやかに立ち上がる能力を身につけてほしいと願います。

イノベーションを起こす 人材を育てたい

めまぐるしく変化する社会情勢の中でイノベーションを起こす人は、どのような局面に際してもひるまずに進んでいける能力を持った人だと思います。そういう能力のために私が大切にしたいのは、在学中に多くの「成功体験」を積み重ねることです。ほんの小さなことでも、自ら目標を決めて挑戦して成功するというプロセスを経験することは、実社会で生きていく上での大きな支えとなりますし、失敗を不必要に恐れることもなくなります。そのために、できるだけ多く、学生がチャレンジできる場を用意できるよう努力したいと思っています。

国際化についても推進力を強めています。本学は前学長時代の6年前から留学生を増加させる取り組みを行っています。それとともに学内にグローバル・カフェというオープンなスペースを設け、各国の留学生とともにランチを楽しんだり、プレゼンテーションを行ったりできるようにしています。最初はなかなか利用する人が少なかったのですが、最近は一か月あたり延べ1,000人近くの学生が利用するようになりました。TOEICやIELTSを受験するための講座やプレゼンテーション技術

を磨くための講座も開設しており、そこでは留学生たちが自主的にアシスタントを引き受けて、日本人学生をうまくサポートしています。

また、学部の枠を超えた全学的な教育プログラムとして「ネクストプログラム」という特別教育プログラムも実施しています。これは理系の学生が人文社会系の勉強をしたり、文系の学生が情報処理を学んだりすることで、より広い視野を身につけることを目指しています。

地域に根ざし ともに活性化

私はもともと泌尿器科の臨床医で、2001年に当時の香川医科大学に赴任したのですが、そこで初めて香川県では臓器移植のドナーが極端に少ないことを知りました。当時香川県には、腎臓だけでも150人以上移植を待っている方がいたのですが、県内からの腎臓提供の事例は一例もありませんでした。そこで私は、まず、香川県内にある臓器提供ができる施設から脳外科や救急を中心に、医師・看護師に参加してもらい「香川県臓器移植ワーキンググループ会議」を2002年に発足させました。この中で数多くの移植事例を検討していくと同時に、メインとなる病院で臓器提供のシミュレーションも実施するようになりました。スキルを身につけた医療関係者が増えるとともに臓器提供の事例も増え、着実にシステム化が進んでいます。この活動を通して医療者が地域に貢献することの意義を体験しました。

大学改革における経済学部の再編では「観光・地域振興コース」を設けましたが、地域振興にも臓器移植のケースと同様に長期的視点が必要です。「観光・地域振興コース」はDMO (Destination Management Organization: 観光地域づくりを推進する組織) 人材を育成することが一つの目標ですが、今の大学生が社会の中で中堅となる20年後にはコ

ミュニティの形も現在とは随分変わっているだろうと予測しています。香川県では小豆島や男木島などに移住する人が年々増加していますが、20年後には、例えば、住民票こそ東京にあるものの一年の半分以上を四国で暮らし、地域のコミュニティに参加するという人も増えているのではないのでしょうか。むしろ、そういう新たなコミュニティ形成を目指すために今何ができるかということを考えるべきなのかもしれません。

さらに今後、人々の暮らし方の変化と連動し、重要性を増すのはリカレント教育だと思っています。人生100年時代を迎え、自分に再投資する人が増え、バラエティに富む社会人教育が求められます。また、社会の変化に応じ業態を変化させようとする企業では、企業人教育というものも重要性を増すと思われます。本学ではそれらのニーズに応えられるよう大学院を再編し大きな受け皿となって地域に貢献したいと考えます。

ブランド力を高め 世界に通用する大学へ

大学改革の一環として2018年4月に企業や自治体との連携を図る「産学官連携統括本部」を設置しました。組織対組織の協働研究の窓口の1本化が目的です。さらに、大型研究プロジェクトを推進するオープンイノベーションのプラットフォームとして、同年10月に「イノベーションデザイン研究所」を開設しました。共同研究は香川県に限らず、県外でも本学の能力が活かせるものであれば積極的に取り組み、大学のブランド力のアップに努めていきます。現在すでに県外企業とのプロジェクトが進行中で、それとは別の研究も近々スタートする予定です。そして、こうした新たな成果による収益力向上も大学運営の狙いの一つです。

さらには、学生の多様化を促進するため首都圏の大学との対流促進事業にも着手しています。芝浦工業大

学との間で行っている大学生対流促進事業がそれで、地域課題の発見・解決を目的に4泊5日のフィールドワークや半年以上の長期滞在に取り組むものです。地域の魅力をプレゼンテーションしたり、体験プログラムを実施したりする中で、ものの見方や考え方の違いに気づかされ、学生にとっては大きな刺激となっています。対流先の首都圏や近畿圏の大学は今後徐々に増加させる予定です。こういった事業を通じて、大学の魅力化を図るとともに、都会の若者にも地域に目を向けさせる効果を期待しています。

2019年は旧香川大学が創立して70年の節目の年を迎えます。改革のスピードを緩めず、新たな課題を見つけ出し挑戦し、ユニークな存在として世界に認知される大学を目指していきます。

おスゝメ本

木を植えた人 (ジャン・ジオノ)



医学部の教授時代、入局してきた若い医師に必ず手渡していた一冊。老農夫がたった一人で荒廃した山岳地帯にひたすらどんぐりの実を植え続け、長いときを経て緑の森が再生する物語。今は誰も見向きもしないことで、自分の信念に基づいて黙々とやり続けることの大切さを教えてくれる。

『木を植えた人』
ジャン・ジオノ著 原みち子訳 (こぐま社)

Company Profile

国立大学法人 香川大学

●所在地:
(幸町キャンパス)
〒760-8521 香川県高松市幸町1番1号
TEL. 087-832-1000 (代)
<https://www.kagawa-u.ac.jp/>

●旧香川大学は1949 (昭和24)年、旧香川医科大学は1978 (昭和53)年に開学し、2003 (平成15)年10月に統合し、新香川大学開学。2004 (平成16)年4月国立大学法人化

●学生数: 学部学生5,636名/大学院生733名 (2019年5月現在)

●関連施設: 林町キャンパス/三木町医学部キャンパス/三木町農学部キャンパス/教育学部附属学校園